大浦の釈迦堂

地域の信仰に守られた古仏

内海大橋を渡って西に進み、内海中学校の100mほど先の駐在所前の三差路を左に折れると、大浦の集落に入ります。その中道をまっすぐ上っていくと、那須与一の守り本尊を所蔵するという海宝山善正寺の前に出ます。そこからさらに100mほど上ったところに、大浦の釈迦堂があります。

この辺りは、地名を郷上といい、天平9(737)年3月、行基によって創建されたと伝えられる、光明山遍照院蔵福寺があったところです。しかし、延喜18(918)年5月の大雨で付近の山が崩れ、蔵福寺も崩壊してしまいました。翌年、蔵福寺は平地区の曽根に移され、延命山常楽院と改号しました。現在の仏徳山常楽院がそれです。

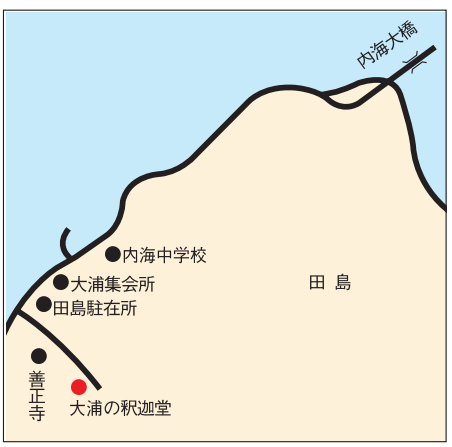
大浦の釈迦堂は、町内では最も古いお寺と伝えられる蔵福寺(現常楽院)の跡地に延長2(924)年に建立された寺で、金明山幢福寺といいました。

以来、何度かの改修・再建を経て今日に至っていますが、宝永3(1706)年の再建時の記録によると、田島・横島・百島などから浄財が届いており、当時は備南の瀬戸内周辺に広範な信者を持つ寺であったことがうかがえます。

現在の堂は、平成元(1989)年に新築したものですが、堂内に安置されている木造釈迦如来坐像は、像の高さに比べて深い奥行きを持った重厚な仏像で、室町後期の優れた仏像として市の重要文化財に指定されています。

大浦の釈迦堂

木造釈迦如来坐像



(2004年6月号に掲載)

内海町東部に伝わる源平伝説

内海大橋南詰を左に折れ、東回りに海沿いの県道を3kmほど行くと、クレセントビーチに出ます。この浜の沖合い200mに、周囲730mの小さな無人島が浮かんでいます。この島が矢ノ島です。昔から白鷺が群生し、矢に用いる竹が繁殖する島として知られ、江戸時代には、福山藩へ度々矢竹を送っていました。

文治年間（1185～1190年）、讃州の戦いに敗れた平氏は、備後鞆の浦を経て隣の能登原に逃れます。かわって平氏を追跡してきた源氏の軍勢が、鞆の浦に陣を張り、那須与一の一隊を田島に陣取らせて、平氏の軍勢と対峙させました。

ところが、両陣営の篝火に驚いた矢ノ島の白鷺の群れが、夜になって一斉に騒ぎ立てました。夜陰に乗じた源氏の総攻撃かと早合点した平氏は、能登守教経を先頭に、白旗めがけて矢をつがえました。やがて、その騒動が白鷺の羽ばたきだったとわかり、安心して陣営に戻り、深い眠りについたのでした。

源氏の襲撃は、翌朝未明に始まりました。休眠中であった平氏は、ひとたまりもなく散乱敗走し、わずかに残った将兵たちは、御座船を守りながら西国に向かって落ち延びていきました。

この合戦で、平氏強弓の武将、教経が放った大矢が島に突き刺さり、やがて芽を吹き若葉を生じ、矢竹の繁茂する島になったと伝えられています。

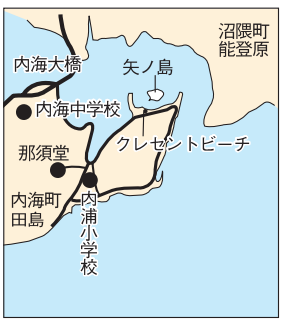
また、田島の内浦には、那須与一宗隆の陣跡を伝える那須堂が残っており、大浦の善正寺には、那須与一の陣中守本尊が秘仏として安置されています。

（2004年9月号に掲載）

矢ノ島

▶那須堂

▲那須与一の陣中守本尊



宮脇山八幡奉納絵馬

紀州高野村仇討ち

内海中学校のすぐ西隣に、寛平4（892）年の創祀を伝える宮脇山八幡神社があります。拝殿中央横に、日本最後の仇討ちとされている「高野の仇討ち」を描いた絵馬があります。

安政4（1857）年、赤穂藩主森忠弘の急死により、世嗣ぎ擁立をめぐって、江戸家老森続之丞と国家老森主税が対立するお家騒動が勃発しました。

宮脇山八幡神社

文久2（1862）年になって、安政の騒動で失脚していた森続之丞の陰謀により、西川升吉ら尊皇攘夷の急進派たちが、12月9日夜陰に乗じて執政森主税と参政村上真輔を惨殺するという事件が起こりました。以後、赤穂藩は森続之丞が掌握するところとなり、不穏な空気を抱えたまま「明治」の世を迎えます。

文久の事件で襲撃された村上真輔の4人の息子とその親族・剣友ら総勢7人は、明治4（1871）年2月30日、八木源右衛門ら文久の残党7人が、森家廟堂の守り役として仇討ち法度の高野山に逃れようとしていることを知り、高野山下の佐水峠に待ち伏せし、首尾よく討ち果たしました。

「紀州高野村仇討ち」絵馬

この場面を、武士の名前入りで描き上げたのが「紀州高野村仇討ち」絵馬です。この事件が契機となって、日本では明治6（1873）年、すべての仇討ちが禁止されました。

この絵馬は明治のころに流行し、多くは伊勢参りの土産として各地の神社に奉納されましたが、残存する例は少なく、当時の世情を物語る貴重なものです。

（2004年12月号に掲載）

奥之坊の寺伝
極彩色の釈迦涅槃図

田島と横島を結ぶ睦橋手前を左折し、山王神社の先を左へしばらく行けば、宝蓮山如意輪寺の参道に出ます。通称「奥之坊」と呼ばれる古刹です。

天暦8(954)年、田島東部の内浦に創建された寺を、治承4(1180)年、高倉上皇が現在地に移築し、藤島八幡(現宮脇山八幡)の別当寺にしたと伝えています。境内の小高い丘には、今も八幡社の祠が祭られており、小さな懸仏が残っています。

絹本著色釈迦涅槃図

奥之坊には、1982年に指定を受けた県重文「絹本著色釈迦涅槃図」一幅が収蔵されています。釈尊臨終の情景を絹地に極彩色で描いた室町末期の作品で、その筆致や文様の美しさは、専門家の間でも高く評価されており、時代的な特色がよくうかがえます。特に、釈尊臨終の悲報を聞いて、阿那律尊者を先頭に摩耶婦人一行が雲に乗って馳せつける様子が、左上に描かれているのも、涅槃図としては珍しい構図となっています。

また、この寺には、寺門の繁栄と興隆を祈念して、上皇自らが植樹したと伝えられる樹齢800年余りの巨大な「影向の松」がありましたが、20年ほど前に枯死し、現在は樹脂加工した根株だけが現地に保存されています。

「影向の松」の根株

(2005年3月号に掲載)

草深の唐樋門

創建時の姿のままに

沼隈町のバス路線、新川線「千年橋」バス停で下車すると、すぐ目の前に江戸時代初期の寛文年間（1661～1672）に開かれた干拓地、「磯新涯」の堤防があります。

堤防の北斜面には、ソメイヨシノが植えられ、春には桜の花が咲きそろい、それは美しくも楽しい眺めを見せてくれます。

磯新涯堤防の東端、山に接する所にある幅4.6mの水路には、用水を調節するための「樋門」が設けられています。

唐樋門全景

樋門の上屋には、開閉作業をするための4m×4.6mの本瓦葺（ぶき）で切妻屋根の樋門操作小屋「樋之堂」があります。

この樋門部分と樋之堂部分を合わせて、「草深の唐樋門」と呼んでいます。この唐樋門は、磯新涯の農業用水の調節や、海水が干拓地に浸入することを防ぐための施設として造られました。

永年の風雪にもよく耐え、破損も少なく、ほぼ創建当時の姿をとどめています。そのため、瀬戸内海地域の干拓研究において大変貴重であり、1980年1月に県史跡に指定されました。

樋門のそばに「樋の上」という地名を残した草深の唐樋門は、建築から300年余り、草深一帯の田畑を守り続けてきました。がっしりと組み上げられた石垣をはじめ、太い柱のあちこちに継ぎ足しや修復の跡を残しながら建ち続ける姿は、時の流れを静かに語りかけているようです。

樋之堂

（2005年6月号に掲載）

西海捕鯨

内海町漁民の活躍の証

内海町の田島漁民は、17世紀末から19世紀末にかけて、実に200年にわたって九州西海の捕鯨に参加した歴史をもっています。鯨を追う操船の技術や、網を拵える巧みな技を買われての進出でした。

内海中学校のすぐ西隣りの参道の奥に、田島全体を氏子とする宮脇山八幡神社があります。40段ほどの石段の両脇には、神社再建時の寄付者の名前を刻んだ石柱が、びっしりと並べてあります。

捕鯨会社から贈られた宮脇山八幡神社の注連柱

最上段の注連柱の西側に、1889（明治22）年6月、肥前国・五島捕鯨会社の役員らによって贈られた寄付碑が建てられています。肥前国・佐賀、同呼子、壱岐国瀬戸浦波座士の里・宇久島（五島列島）などの文字を見ることができますが、これこそ、長い年月の中で関係を深めてきた西海捕鯨進出の証しでもあります。

町地区の中ほどにある如意輪寺（奥之坊）の本堂廻廊の長押にも、長崎県北松浦郡・生月捕鯨組の人たちの名を連ねた寄付札が並んでいます。

町地区には、中世田島水軍の城跡を伝える天神山があります。その山麓から西の海岸に向けて、中央辺りを故意にカギの手に曲げた幅広い道路が延びています。中世城下町づくりの戦略道路ではないかともいわれていますが、この道路が、近世田島漁民の網づくり広場として利用されていました。

内浦の皇森神社に奉納された鯨のヒゲ

横島の北面に広がる志垣の浜は、西海捕鯨に進出した漁民たちが、往復に利用した双海船を休めるために使った大事な浜でした。

（2005年7月号に掲載）

常石八幡さんの石鳥居

権力に屈しなかった民衆の逸話

「常石」バス停で下車し、奥に続く小径（こみち）を２００ｍ程登ると、小高い丘の上に建つ常石八幡神社の石鳥居にたどり着きます。明治30（１８９７）年に奉納された、この明神鳥居をくぐり、短い石段を登って随身門を抜けると、玉垣に囲まれた神社境内に入っていきます。境内には、神社改築を刻んだ大きな石碑や狛（こま）犬などの石造物が奉納されており、長い間、大切に守られてきたことがわかります。

明神鳥居

昔の参道は、民家の間を登って、本殿の裏側に出るものでした。その参道に、安永７（１７７８）年の夏に鳥居が奉納されています。

高さ4.5ｍのこの明神鳥居の石柱に刻まれた「惣氏子」には、民衆のひそやかな抵抗の歴史が秘められています。

安永７年、神社に鳥居を奉納する話がまとまり、氏子から集めた寄付で、参道入り口に立派な鳥居が建てられました。ところが、氏子たちは、石柱に刻まれた文字を見て驚きました。庄屋の名前だけが彫られていたのです。皆は大変不満な様子でしたが、誰一人として異議を唱えることもなく、奉納式が執り行われました。ところが、残念でたまらない氏子の数人が、その夜のこと、鳥居に書かれていた文字を削り取り、その横に新しく「惣氏子」と彫り刻みました。

鳥居に刻まれた「惣氏子」の文字

一夜明け、「惣氏子」の文字を見た人びとは「これで、皆が奉納した鳥居になった」と、喜び合ったと言います。

この話は、権力に屈しなかった民衆の逸話として、親から子へ、子から孫へと密かに語り継がれてきました。

（２００５年８月号に掲載）

西光寺の鐘と脂取松

数奇な運命をたどって

下山南の「矢繰（やくり）」バス停から北側の山裾に見える西光寺境内の石段を登り、山門を抜けると右側に鐘つき堂があります。

ここに吊（つ）られている鐘は、厳島神社の外宮、地御前神社に天文13（1544）年6月、大内義隆によって奉納された鐘です。宝暦5（1755）年の火災に遭った後は、使用されないまま保存されていましたが、ある時期、賀茂郡の眞光寺に移っていました。

一方、西光寺では、幕末のペリー来航に備えて鐘を供出し、そのまま無鐘となっていましたが、明治10（1877）年ごろ、広島市己斐でこの鐘を購入し、持ち帰った、と伝えられています。

資源の乏しいわが国では、太平洋戦争中には、あらゆる物資が不足し、さまざまな物資の供出が呼びかけられましたが、このような由緒ある西光寺の鐘は、供出を免れ、昭和54（1979）年には県重要文化財に指定されました。

さらに、戦争末期ともなると、物資の不足、特に燃料不足は深刻になり、松脂（やに）や掘り出した松の根を精製し、石油の代用品として利用するようになります。

松脂は、松の樹皮をはぎ、幹に傷をつけ、にじみ出る脂を竹の筒などに集めるというもので、この作業の中心は子どもたちだったといわれています。

境内の中心にある松の幹には、松脂を採取したV字型の傷跡が残っています。そんな悲しい戦争の物語を私たちに静かに語りかけながら、「脂取松」は、青々とした枝ぶりを今に見せてくれています。

（2005年10月号に掲載）

沼隈

脂取松

鐘撞堂

田島版新四国八十八カ所
霊場を訪ねて田島を一巡り

内海町の田島に、四国八十八カ所を模した田島版新四国八十八カ所霊場が設けられています。いずれも小さな石仏が祭ってあり、四国霊場にちなんだ番号と寺号が刻み込まれています。

大正12（1923）年に刊行された『沼隈郡誌』の「社寺誌」の中に、「田島村、弘化四（1847）年三月三日八十八カ所を新設す」とあります。また、江戸末期、田島・天満村の組頭を務めた「政次郎」の覚書『儀禄帳』の中には、「弘化三丙午歳七月八日、当島（田島）新四国霊場相定メ…」その世話を奥之坊に依頼したことが記されています。

1番札所霊山寺

これによって、田島八十八カ所霊場は、弘化4年に完成したことがわかります。

田島版八十八カ所霊場は、大浦地区の釈迦堂から始まります。そこから八幡宮裏の農道を東に抜け、天満集落から県道に下り、海沿いの道を釜谷、内浦、寺山、箱崎、古屋、小用地、小畑、大畑、南、町、平を巡り、再び大浦の釈迦堂に戻ってくる形で設定されています。最終八十八番石仏は、大浦の内海中学校の正門西側に祭ってあります。

88番札所大窪寺

現在、八十八体の石仏は完全に保存されており、最近地域の人たちにより、すべての石仏のそばに番号、山号、寺号、本尊を刻んだ石柱が立ち、須屋なども寄進されたので、非常に順拝しやすくなっています。

（2005年11月号に掲載）

青年の父 山本瀧之助

「一日一善」を提唱

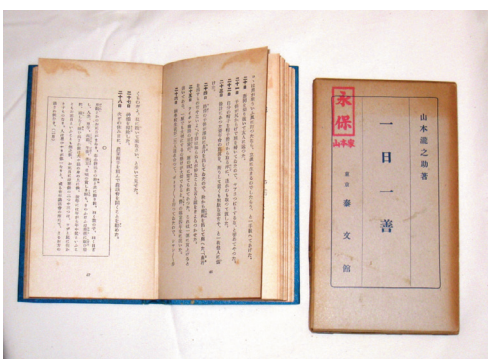
沼隈町草深の「新川」バス停から、東に川沿いの道を1kmほど進むと、木造平屋造り麦藁屋根の「山本瀧之助生家」が左手山の斜面に見えてきます。青年が自ら学ぶことの大切さと、青年たちの全国的な組織化を語り続けた瀧之助は、明治6（1873）年、この地に生まれました。

瀧之助は、小学校教師をしながら、明治29（1896）年、青年たちに向けて「均（ひとし）く是（こ）れ青年なり」で始まる最初の著作『田舎青年』を出版します。

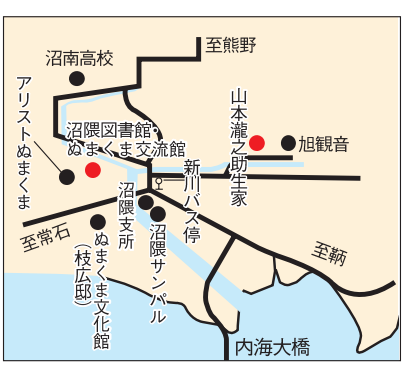
その後も『一日一善』など著作は15冊にも及び、一方で『沼隈時報』などの雑誌の執筆活動を続けながら、全国各地に出向いて、講演活動を精力的にこなします。

こうして瀧之助は、青年たちとの交流をより深めていきますが、活動の拠点はあくまでもここ沼隈の地に置き、青年運動に生涯をささげました。このとき、運動を進めていく上で基本とした考え方は、「一歩後退と一歩前進」です。これは、「退一歩而待人（いっぽしりぞいてひとをまち）、進一歩以当事（いっぽすすんでもってことにあたる）」という瀧之助の唯一の格言としてまとめられます。

沼隈図書館にある石碑



瀧之助の著書『一日一善』



生家の隣にある旭観音は、瀧之助が仕事に行き詰まったとき、必ずお参りしたといわれています。

緑に囲まれた生家を後に、来た道を川沿いに下って行くと、山南川の向こうに「沼隈図書館・ぬまくま交流館」の建物が見えてきます。その一角には、「山本瀧之助記念室」があり、数多くの資料が保存展示されています。

展示室の中には、『田舎青年』の手書きの原稿や、「一日一善発祥之地」の額、竹久夢二の挿絵入り雑誌『良民』などがあり、瀧之助の人となりを詳しく知ることができます。

（2005年12月号に掲載）

能登原とんど

市無形民俗文化財

沼隈町能登原にある能登原小学校運動場には、1月の第2日曜日の午後、高さ10メートル余りの6基の「能登原とんど」が並びます。学区内の6地区で作られたあでやかな飾りとんどで、それに魅せられ大勢の人が見学にやってきます。

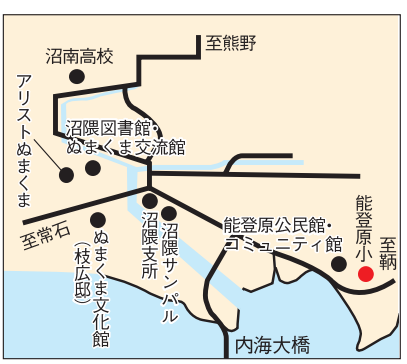
とんど作りは、子どもたちが中心となり、3週間ほど前から始めます。各戸から新藁を集め、山から黒松や竹などの材料を切り出し、色紙でサクラやボタンの飾り花を作るなどの諸準備を済ませます。

能登原とんど

当日は、櫓状に組み立てたとんどをさか藁で覆い、正面に干支の額と注連縄、その上部は杉の葉を使ったタグサやサクラ飾り、色テープで飾ります。

完成した櫓の中には子どもが乗り込み、内部に置かれた太鼓の音にあわせて「そりゃ、とんどじゃ、よい」のかけ声を響かせながら、倒れないように手綱をひいて地区内を練り歩いてから、小学校に向かいます。

火がつけられるとんど



午後2時ごろには、運動場に勢ぞろいし、それぞれの出来栄えをお互いに自慢し合います。

しばらくの後、「それー」のかけ声に合わせて、勢いをつけた6基が、にぎやかにとんど回しを行い、最高潮に達します。寒風の中で躍動するさまは、まさに圧巻です。

その後、それぞれの地区に持ち帰り、無病息災、家内安全を願いながら火がつけられます。

能登原とんどは、かつて福山城下で行われていた練り歩きの様式を今に伝える貴重なものであるとして、市無形民俗文化財に指定されています。

（2006年1月号に掲載）

千年藤
800年余の時を経て

沼隈町「千年橋」バス停から江戸時代の干拓地「磯新涯」の堤防を西に進み、山南川を過ぎると、内海大橋の丸いアーチに続いて、高い橋げたが見えてきます。

その手前、敷名山のふもとに、何代目かと伝えられる「千年藤（ちとせふじ）」があります。

藤棚

『平家物語』巻4には、治承4（1180）年4月1日、高倉上皇一行が船で厳島参拝からの帰路、立ち寄った敷名の港での出来事が書き記されています。

それによると、一行は平清盛が造営させた御所を利用しないまま船で過ごします。船では、衣替えの日を迎えた都の様子などに思いを巡らせていたのです。

そうした折、上皇は、船から眺める敷名の浜に咲き誇っていた藤を賞賛し、採りに行かせます。使いの者は、藤の花を松の枝にからませたまま持ち帰りました。それを大納言隆季は

「千年へん 君がよわひに 藤波の
松の枝にも かかりぬるかな」

千年藤の故事・平家物語

と、歌に詠み献上します。

以来、手折られたこの藤は「千年藤」と呼ばれるようになり、あたり一帯は「千年」と呼ばれるようになりました。

寛保3（1743）年4月福山藩主阿部正福は、領内巡視時に千年藤を鑑賞し「千年藤」の立札を立てさせています。明治時代の歌人、正岡子規は、この場面を題材に、

「みつかさの 折りてささぐる 松ケ枝に
長き短き 藤浪の花」

など数首を詠んでいます。

春4月5月ともなると、千年藤にちなんで、内海大橋への歩道に植えられた色とりどりの藤の花が、青い空や海を背景に咲きそろい、美しい景色を見せてくれます。

（2006年4月号に掲載）

敷名番所跡
「口無しの海」の関所

『平家物語』の故事にちなむ「千年藤」から西に向かうと、内海大橋の橋脚の下に、「敷名番所跡」の石碑が建っています。

沼隈町敷名と内海町田島の間は、海の幅が狭い上に地形が複雑で、潮流の微妙な変化に針路を誤り、座礁する船が多かったため、海の難所として知られていました。船人からは、行く手を遮られる「出口が見えない海」として恐れられ、いつしか、「出口無しの海」から、「口無しの海」とも「梔子の海」とも呼ばれるようになりました。

敷名番所跡

こうした敷名の戦国時代の様子を、井伏鱒二は『鞆ノ津茶会記』に「口無しの瀬戸の山の根に保塁を築くことに相成った。場所は田島と敷名の間の峻険なる所である」と記しています。

江戸時代になると、海の関所である「敷名番所」が置かれ、福山領内に出入りする船の警備や、特産品の備後表の積み出しに際して荷改めを行うようになります。古記録には、「常石敷名番人二人」とあり、番所の姿を彷彿とさせられます。

その石碑の横にある遊歩道を少し登ると、幕末の漢詩人菅茶山が、寛政12（1800）年に詠んだ「梔子湾」の詩碑が見えてきます。「たなびく靄の中に見え隠れする小さな海辺の村、そのどこに行宮はあったのだろう」と歌いだし、平安の昔の千年藤の故事に思いを馳せています。

菅茶山「梔子湾」詩碑

さらに遊歩道を登って行くと、内海大橋の歩道に出ます。ここからは、緩くカーブを描いた内海大橋や、波静かな瀬戸の海に色濃く島影を映す島々が見渡せます。

（2006年6月号に掲載）

阿伏兎観音参道

文学碑が点々と

沼隈町「阿伏兎観音入口」バス停から磐台寺までの道には、歌や文章を刻んだ石碑が点在し、潮風が吹き抜ける参道の楽しみの一つになっています。そんな石碑の中から、いくつかを紹介します。

バス停からの道が海と出会うところに、桑田抱臍の狂歌碑があります。沼隈町山南出身の抱臍は、江戸時代後期に、備後の狂歌師の第一人者として活躍した人物として知られ、その著作『阿伏兎土産』の中にある狂歌から、

「梓弓ひくしほどきに矢の島の
　あたりは誰も興にのりつね」

が、石碑に刻まれています。

さらに参道を進むと、駐車場の生け垣の中に、宮城道雄の文学碑があります。1948（昭和23）年、墓参のため鞆を訪れていますが、その時の随筆『鞆の津』から、次の文章が石碑に刻まれています。

「私は観音様の慈悲や親の慈悲というようなものを感じながら、外へ出て朱塗の手摺やぎぼしなどをさぐってみたが、古びた感じであった。足元の廊下が少し海の方へ傾いていた。」

さらに進んで、参道両脇の家並みを抜けると、再び海を望む山裾の駐車場脇に、十返舎一九の文学碑があります。『東海道中膝栗毛』で知られる弥次郎兵衛と北八が、阿伏兎観音に参拝した時の様子を書いた『厳島参詣膝栗毛』から、

「観音堂より見おろせば、白波足元に湧きかへりて、目も眩き足の骨もかゆきばかりに、
　石垣はさながら蜂の巣にも似て
　　光明のさす阿伏兎観音」

が、観音堂の風景版画と併せて石碑に刻まれています。

（2006年8月号に掲載）

桑田抱臍の歌碑

宮城道雄文学碑

十返舎一九文学碑

山本瀧之助頌徳碑

青年の父

十返舎一九の文学碑から、潮風が吹き抜ける阿伏兎観音（磐台寺）への参道を進むと、高さ3mほどの石碑が見えてきます。石碑には、丸山鶴吉貴族院議員の揮毫によって「青年の父 山本瀧之助先生頌徳碑」と刻まれています。

題字の下に埋め込まれた金属銘板には、当時の大日本連合青年団理事長田澤義鋪が、瀧之助の功績を次のように記しています。1873（明治6）年11月に千年村で生まれ、17歳で小学校に職を得、青少年を指導しながら、24歳の時、名著『田舎青年』を出版し、「地方青年ノ奮起ヲ促シ、全国青年結合ノ要ヲ力説、青年教化ノ為メ」に、その生涯を捧げた。

風光明媚で知られる阿伏兎岬の、現在、宮城道雄の文学碑がある付近を選び、1935（昭和10）年5月19日、「山本瀧之助先生頌徳会」によって、石碑の建立除幕式が、盛大に行われました。この金属銘板は、第2次世界大戦中に供出され、石碑も、戦後台風被害を受けたまま放置されていましたが、修復計画立案から10年余りの時を経て、1964（昭和39）年3月20日に現在の場所へ修復移転されました。この時、金属銘板も復元されています。

1917（大正6）年12月、瀧之助は磐台寺の協力を得て、飯米持参による青年の宿泊講習を実施しています。この講習会は、その後、瀧之助が全国を巡回しながら、約120カ所で実施した「巡回青年講習所」の先駆けとなる記念すべきものとなりました。そのため、昭和の石碑移転にあたっては、磐台寺から全面的な支援を受けています。

こうした瀧之助の多方面にわたる活動は、ぬまくま図書館のある「ぬまくま交流館」の「山本瀧之助記念室」に展示紹介されています。

（2006年10月号に掲載）

山本瀧之助の胸像

山本瀧之助頌徳碑

阿伏兎の観音さん

瀬戸内を一望

山本瀧之助頌徳碑から、心地よい潮風に誘われて海沿いの参道を進むと、磐台寺の石段の向こうに本堂の大屋根、そして、市保護樹木であるウバメガシの大木の濃い緑の葉影に透けて、朱塗りの観音堂が見えてきます。

磐台寺は、瀬戸内海に突出した沼隈半島の東南端、瀬戸内を一望できる阿伏兎岬の絶景の地に建てられています。ここから鞆の浦にかけては、名勝「鞆公園」に指定され、美しい景色が展開する瀬戸内の中でも特に風光明媚な場所です。

歌川広重浮世絵・阿武門観音堂

磐台寺観音堂は、通称「阿伏兎の観音さん」と呼ばれ、古くから航海の安全、子授け、安産などの祈祷所として信仰されてきました。堂内には、寛和（985～986年）の頃、花山院が航海安全を祈願した石仏の十一面観音像が祭られています。

現在の観音堂は、元亀年間（1570～1572年）毛利輝元の寄進によって建立されて以来、福山歴代藩主の庇護を受けてきました。また、瀬戸内を往来する各地の大名や地元民からも寄進を受けながら、観音堂の修理や伽藍の維持を行ってきたことが、古記録に記されています。

磐台寺の回廊

戦後は、1951年から2年をかけて観音堂の屋根のふき替えと回廊や鐘楼の彩色が行われ、1956年には観音堂が重要文化財指定を受けました。

2004年8月の大型台風16号、9月の18号では前例のない大被害を受け、2005年、観音堂の災害復旧工事を終了しましたが、その工事中、屋根の軒丸瓦には金箔が施されていたことが判明しました。

朱塗りの観音堂に金色の屋根瓦が、碧い海を背景に陽の光を浴びながら鮮やかにきらめいて、海上を行き交う人びとに深い印象を与えたことでしょう。

（2006年12月号に掲載）